



# 北海道の道の情景

木内 政海

20年程前、「BUS STOP」というフリーペーパーの仕事をしていたことがある。友人のデザイナーが創刊した長距離バスの車内誌。取材で函館などへ、2人でよくロケに出かけた思い出がある。

彼はロケ先で道が分からなくなると、「道はつながっているから大丈夫。のんびりこう」というのが口ぐせ。その落ち着きと安心感のある言い様が、彼の人柄をよく表わしていて、大好きな言葉だった。

久しぶりに、北斗市のトラピスト修道院へ行く仕事があった。桜色が映え、まさに春を感じる柔らかな日差しの中、真っ直ぐに伸びる一本道。まるでジオラマを見ているようだ。思わず、シャッターを押す。たぶん、彼が生きていれば「いいね」と言いそうなカットが見えてきた。桜の奥に続く道は、どこにつながっているのだろう――。



## 少年時代の思い出の道

道といえば、子供の頃はいつもまっすぐな砂利道を自転車で行っていた。住んでいたのは空知管内の砂川市。奈井江町との境界線沿いで、周りには田んぼが広がり、その間を道がまっすぐに伸びている。

美唄市、奈井江町、砂川市を走る国道12号は、日本一長い直線道路(29.2km)であり、当然、国道と平行に走る田舎の砂利道も直線。退屈な風景ではあるが、季節ごとにみせる田んぼ周辺の色合いと表情は、とても豊かだった。

春から初夏に、だんだんと大きくなる青々とした稲。たっぷり張られた水に空の青と白い雲。カエルの合唱が賑やかだ。夏、田んぼにつながる水路にはタニシ、ドジョウ、ゲンゴロウ、ミズスマシ、ヒルがいて、ホタルを見かけたこともある。よくのぞき込んだり捕まえたりしていた。



秋、黄金色の稲穂が垂れると、赤トンボが飛びかいたす。田んぼの周りにある木に棚が組まれ、刈りとられた稲が干される頃、空は高くなり、紅葉が周囲の山々を彩る。冬は一面真っ白な中で、雪合戦、凧揚げ、スキーを履いて犬の散歩と、まるで自分の庭のような顔をして遊んでいた。

## 道で振り返るあの頃の暮らし

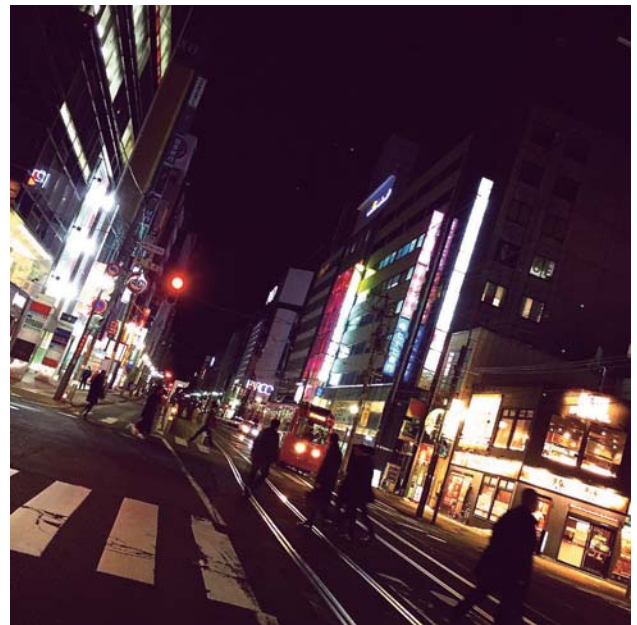
まっすぐに伸びる国道と田んぼに挟まれ平行に走る道を、自転車で1~2km進んでも風景はほとんど変わらない。でも、知らない町に来ている楽しさを感じながら、直線道路をひた走っていた。

姉は6歳くらいの頃、産婆さんと呼ばずに自転車で走っていく父の姿を、窓から見ていたのを覚えているという。陣痛が始まり自宅分娩で産もうとしている母。その横で不安そうに窓を見つめる女の子。まるで山田洋二の映画のワンシーンのようだ。

電話がないような不便さの中でも“生きること”を実感して生活していた家族や周りの人たち。父が一生懸命自転車をこいでいた砂利道に立つと、その頃の生活や風景が見えるような気がした。

## 道のある風景を探して

道内を撮影で回っていると、肝心の撮影より移動時間の方がはるかに長いことがよくある。漠然と流れていく風景をみていると、「あっ、今この瞬間にシャッターを切りたい」と思うことがよくある。とはいえ、目的地を目指し集中しているドライバーに「すみません、止めてもらえますか?」と頻繁に



声をかけるのは、やっぱりちょっと気がひける。

しかし風景はまさに一期一会、光の回りかたで一瞬のシャッターチャンスが生まれる。

これはなにもロケ先だけのことではない。日常歩いている街中でも、見慣れた風景の中にふっとちがった表情を見つけたと感じるのは、自分の感覚が何かを求めている時なのだろう。

仕事で要求される写真は構図、光の加減、アングルなど色々と制約のある中で、自分なりのものをだそうとするものだが、何気なく街中を歩いていると、見慣れた風景がしっくりくる構図になったり、日差しの動きが予想以上の奥行きを見せたりする時がある。そんな時、制約のない誰にも遠慮のいらぬ写真を撮る。

街中の雑踏や自然、青空の広がる町や村、色々な風景の中、ファインダーにいれる道が好きだ。画面の真ん中や端の方、真横に走っていたり斜めだったり。

道のラインがなにかしらの奥行き感をだすからか。普段、限られたフレームの中に情報をつめこむことに足かせを感じ、むしろやりがいの錯覚を持っていたが、本当はフレーム外の道のようなどこへ続くかわからない、創造力のある絵を撮りたいのかもしれない。

木内 政海  
フリーカメラマン

■ profile  
30年以上にわたり広告や雑誌等で活躍する札幌のベテランカメラマン。最近では、吉田類責任編集の「旅人類」の専属カメラマンとして道内各地の風景や観光名所、飲食店など幅広い撮影を行っている。

